

## 聖母の被昇天

2014.8.10

ルカ 1・39-56

聖母の被昇天の祝いには、独特な雰囲気を感じられます。聖母の被昇天の祝いはもちろん、私たちにとって大きな喜びに包まれた祝いにちがいありませんが、同時に、どこかいいようのない哀愁を感じさせるところがあります。聖母の被昇天の祝日が、日本の私たちにとっては、あの悲惨な戦争の歴史を想起させる終戦の日と重なっているという事情もあります。けれども、聖母の被昇天の祝いが、私たちにとことなく哀愁を感じさせるのは、そのためだけではありません。

聖母の被昇天の祝いは、地上の生活を終えられた聖母が、御子イエスの復活の恵みに与って、天の栄光に上げられたことを祝う信仰の祭りです。私たちの母である聖母は、今や天に昇られ、神の栄光のうちに、御子イエスのお側近くにいてくださるのです。その聖母を母と仰ぐ私たちは、この地上の生の中であって、天の栄光のうちにおられる聖母に祈りをささげるのです。私たちの母である聖母は天の栄光のうちにおられ、その聖母を母と慕う私たちはこの地上から天に昇られた聖母を仰ぎ見るという構図が、聖母被昇天の祝日に独特の哀愁を私たちに感じさせるのではないかと思われまます。事実、私たちは聖母の被昇天において示されているように、天を仰いで聖母の取次ぎを願って、祈りをささげてきたのではないのでしょうか。

若い頃に洗礼を受けられた古くからの信者の皆さんは、カトリック聖歌集に集められている聖母マリアを讃える聖歌に懐かしさを感じておられることでしょう。カトリック聖歌集にあるこれらの聖母マリアの聖歌の多くは、カトリック教会に古くから伝えられてきた、天におられる聖母への信心の霊性を生き生きと表現しています。そのような聖母への信心の霊性は、第二バチカン公会議後の現代の教会においても、決して失われてしまったものではありません。天におられる私たちの母である聖母への熱い想いは、私たちがカトリック信者としてこの地上の生活を生きる限り、私たちの心から消え去ることはないのです。

八月に入って、カテドラルで、佐久間神父様と宮内神父様のご葬儀がカテドラル営まれました。60年に及ぶ神父様の司祭としての生活の中で、神父様が働いてこられたそれぞれの小教区の教会から大勢の信者さんたちがご葬儀に参列してくださいました。司祭の葬儀においては、告別式の終わりに、列席の司祭たちが棺を囲んで、「サルベ・レジーナ」という、ラテン語の聖母賛歌を歌う習慣

があります。このサルベ・レジーナの聖母賛歌は、アベ・マリアの祈りと並んで、カトリック聖歌集の聖母の聖歌にインスピレーションを与えた、教会の古くからの聖母への祈りです。そして、このサルベ・レジーナの聖母賛歌は、今でも教会の祈りの一日の終わりにささげる祈りの最後に歌われています。トラピストの修道院などで、寝る前の一日の最後の歌として、灯りが消され、聖母のご像だけに照明があてられる中、静かに歌われるのを聴くことが出来たら、きっと深い感動を覚えられることでしょう。

今日は、聖母の被昇天を祝うミサをともにおささげしていますので、サルベ・レジーナのラテン語の歌詞に表現されている教会の古くからの聖母信心の霊性を御一緒に味わって見たいと思います。

サルベという歌い出しのことばは、アベ・マリアのアベと同じように、日本語では表現しにくい、親愛の情に満ちた挨拶の呼びかけのことばです。それに続くレジーナというマリア様への呼びかけは、今や被昇天によって、全ての者を支配する王として神の右の座におられる、イエス・キリストのお側近くに召された聖母に与えられた名称です。レジーナというラテン語は王という称号の女性形で、女王を意味します。聖母に向かってこのようにお呼びすることによって、私たちは今や、天の栄光の座についておられるイエス・キリストともに、そのお側近くおられて、私たちを庇護してくださる、私たちのレジーナとしての聖母に呼びかけているのです。そのレジーナである聖母は、文字通り、私たちのマーテル・ミゼリコルディエです。すなわち、私たちの憐れみの母です。聖母の憐れみは、母親としての憐れみです。私たちのありようがどのようなであっても、ひたすらに、私たちの身を案じてくださる母としての憐れみです。その憐れみを、私たちは自分がどのようなところに身を落としたとしても、なお期待することが出来るのです。聖母への呼びかけはなお続きます。聖母は、私たちにとって、ヴィータ（いのち）、ドゥルチェード（甘美さ）、スペス（希望）そのものです。そのように聖母を讃えながら、聖母が、私たちにとって、そのようになってくださることを願うのです。すなわち、私たちのいのち、甘美さ、希望そのものとなってくださるよう願うのです。

これに続く、私たちの天のレジーナである聖母への嘆願のことばの中に、暗い人類の歴史の中を生きてきた、私たちの信仰の先輩たちの聖母に寄せる思いの全てが吐露されています。「樂園から追われたエワの子らである私たちは、この涙の谷にあって、吐息をつきつつ、すすり泣きながら、あなたに叫びを上げ続けています。それゆえ、私たち全ての者が声をあげてより頼む御母よ、あなたのその憐れみの眼差しを私たちに向けてくださり、この地上における（肉の）囚われの時が果てる時、あなたからお生まれになった、あなたの御子イエスを私たちにお示してください。心広き、心清き、いとも甘美なる乙女マリアよ。」以

上が、サルベ・レジーナのラテン語の祈りの要旨です。

トラピストのような観想修道会の修道者たちは一日の労働に疲れきった体を引きずるようにして、一日の終わりに、この聖母への賛歌を歌い続けているのです。司祭たちは、司祭としての生涯の終わりの休みにつく前に、聖母へのこの祈りにその生涯を託して、送られて行くのです。

聖母の被昇天の祝日にあたって、カトリック教会の信仰の遺産であるこのような聖母への信心の霊性を新たにしたいと思います。大震災の被害に見舞われ、今なおそこから立ち上がれずにいる多くの方々のことを想い、戦争の悲惨さを忘れてはならない終戦の日の聖母被昇天の祝日にささげる私たちの祈りが、この涙の谷からの全ての人の叫びに結ばれて、全ての者の母となられた聖母のもとに届き、私たち全ての者の憐れみの母である聖母に聞き届けていただけるよう、心を合わせて祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高